HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	太陽燈
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	ほけかんだより, 54, 1-1
Issue Date	2005-07-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39249
Type	article
File Information	hemmi_hokekan54.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2005. 7. 20

ほけかんだより

北海道大学保健管理センター　第54号

太　陽　燈

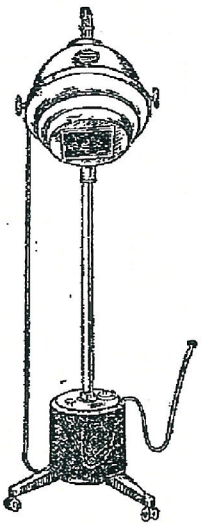
副学長　逸 見 勝 亮

◇祖母は、小学生の僕にときどき「本を読むと結核になる」「胸が薄いので心配だ」と言った。祖母は、活発で人前で怖じけることもなかった従弟と比べて、僕を「いくじのない児だった」と、これは長じてからも口にした。めったに会わぬ従妹は、「高い高い」をすると泣いたんだって、と会えば必ず言う。5歳頃の僕の両下腿部にはいくつもの浮腫――タンパク質・ビタミン不足に起因し、1944～48年には広範囲に発症した――が生じて化膿し、今もその痕跡は明瞭である。効能があるというので、父と一緒に登別の硫黄泉に漬かったことがあった。手許のクラス写真の級友たちは、誰もがほっそりしていて、僕もいかにもひ弱に見える。4年生の僕を「くびなが」とからかう上級生もいた。僕は運動が苦手で痩せており、父は胃腸が弱くて早逝したので、祖母は心配をついロにしたのだろう。

◇わが国の小学校は、発足以来子どもの健康管理、特にトラホーム・寄生虫・齲歯・結核などの検査・予防の場でもあった。体験的には、教室で「検便」容器を提出するときの気恥ずかしさ、一喜一憂したツベルクリン検査、痛かったBCG接種、となるが、わが国における回虫駆除と結核性疾患予防対策は、1890年代以降の学校保健政策抜きに述べることはできない。

ところで、僕が1950年に入学した室蘭市立天沢小学校保健室には太陽燈があった。保健室は2階北側の角で校長室の真上にあたっており、身体検査・BCG接種を行う「恐ろしい」場所に近づく理由はなかったが、大きな円球状の太陽燈は眼を引いた。太陽燈は、結核性疾患（小児結核）の温床とされていた虚弱児に紫外線を照射して健康増進を図ろうと、1930年代以降各地の小学校に広まった。天沢小学校の太陽燈は校舎改築に伴って処理されており、由来を示す資料も得られないので、記憶に最も近い形状の太陽燈を佐藤太平『紫外線療法（特に太陽燈療法）』（1928年、診断と治療社）から引いて掲げておく。

太陽燈



◇誰よりも絵が上手で大人びていたMは2年生に進級しなかった。僕はMがクラスにいないのを訝ったが、その理由は分からなかった。結核性疾患で長期の自宅療養を余儀なくされたと、49年経ってから僕はMから直接聞いた。他にふたりの級友が罹患し、ひとりは進級しなかったとやはり当人たちから聞いた。同級生58人中3人が結核性疾患に罹っていたのである。1950年度の結核性疾患児童は全児童中の0.64%を占めていた（学校保健会編『学校保健百年史』1972年）。概数で8万人ほどである。

◇通知箋病欠欄によれば、僕は1950年は12月に6日、51年は1月に1日、52年は1月に11日、2月に5日、5月に2日、53年には2月に1日、3月に2日、7月に1日、9月に2日休んでいる。54・55年は一日も欠席はなく「精勤賞」のゴム印が押してある。Mもこの頃にはようやく健康に自信が持てるようになったと話していた。ちなみに、1954年度の結核性疾患児童は全児童中0.94%であった。0.1%を切るのは1971年度である。

49年振りに会ったとき、Mは1年生のときと同じように僕より少し上背があり、内股加減に歩き、話すときに少し眉根を寄せた。僕にとって最も印象が強いMは、3年前に蜘蛛膜下出血で亡くなった。